

満鉄図書館と大佐三四五

鞆谷 純一

日本大学大学院総合社会情報研究科

South Manchuria Railway's Libraries and Miyogo Ohsa

TOMOTANI Junichi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

South Manchuria Railway, a railroad company established by the Japanese government in 1906 with the goal of achieving control over Manchuria, operated more than 30 libraries.

The company endeavored to train librarians and dispatched Miyogo Ohsa to the Columbia University School of Library Service.

After having studied in the United States, Ohsa, who held prominent positions as Chief Librarian of Fushun Public Library and Reference Librarian of Dalian Library, engaged in library services in the colony and put into order the book collections seized by Japanese troops in Beijing and Nanjing.

The thesis reveals how Japan's colonial occupation and war had an influence on librarian training, through focusing on the history of the South Manchuria Railway's libraries and the path followed by Ohsa.

はじめに

大佐三四五（おおさ みよご、1899 - 1967 年）という、戦後における図書館業界（以下、図書館界あるいは館界）の発展に貢献した人物がいる。

大佐は、京都府社会教育課長や京都学芸大学附属図書館事務長などを勤め、文部省主催の図書館専門職員養成講師や、司書教諭養成講座主事として、図書館員養成に携わっている。著書として『図書館学の展開』（丸善、1954 年）、『資料の整理と目録の作成』（山本書店、1958 年）等がある。

『図書館学の展開』は、司書課程のテキストのひとつである『図書及び図書館史』（樹書房、1999 年）の参考文献となっている。

大佐は、また「現下学校図書館の諸問題と其対策」（『図書館教育』2 巻 2 号、1950 年）や「我国図書館事業の革新を指導せる米国図書館人の足跡を眺めて」（『土』20 - 22 号、1952 年）といった学校図書館関係の論文を執筆している。これらは、学校図

書館法制定（1953 年）に先立つものであった。

近年には、学校図書館史研究の進展に伴って米国学校図書館思想の紹介者としての大佐の業績も登場するようになった⁽¹⁾。彼の現代にまで繋がる業績と影響の一端が分かる。

この大佐三四五という人物は、大変興味深い前歴を持っている。彼は、戦前において南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）の図書館で勤務し、会社によって育てられた「植民地図書館人」だったのである⁽²⁾。

満鉄という会社は、1906 年設立された日本の満洲経営のための国策機関であった。その業務は、鉄道およびその附属地をはじめ、炭鉱・製鉄所などの経営、各種の調査研究活動など多岐に渡り、「満鉄コンツエルン」を形成していた。

この満鉄は、社業の参考図書館として、1918 年に大連図書館を設立したほか、沿線住民のために各地で 30 以上（分館も含む）の中小図書館を運営していた。これらの満鉄運営の図書館（以下、満鉄図書館）は、内地から有為な人材を呼び寄せ、また自前で図書館員を養成し、「満鉄コンツエルン」の庇護に

より、内地に比べて恵まれた図書館活動を行っていた⁽³⁾。

大佐三四五は、満鉄の会社留学制度によってコロロンビア大学図書館学校に学び、満鉄図書館の生え抜きのエリートとして、撫順図書館長や大連図書館司書係主任として活躍する。

大佐の満鉄図書館時代の軌跡は、本稿で明らかにするように日本が満洲を植民地化し、日中戦争によって北京・南京などの都市を占領していく過程と共にあった。

本稿は、いわゆる「戦争責任」を裁くものではなく、また植民地や戦時下における図書館活動を無条件に賛美するような意図もない。

図書館の人材育成に、満鉄という植民地機関や、戦争がいかに関係したのかというひとつの事例を掘り起こすことが目的なのである。

注

(1) 篠原由美子「資料紹介 メイ・グラハム『日本の学校図書館』」(『図書館文化史研究』18号、2001年)107ページ。

今まど子「CIE インフォメーション・センターの図書館サービスについて：ライブラリアン編」215ページ、(吉田政幸、山本順一編『図書館情報学の創造的再構成』勉誠出版、2001年)所収。

(2) 大佐の略歴については、以下の文献を参照した。
中西利八編『満洲紳士録』昭和12年版、満蒙資料協会、1937年、697ページ。

中西利八編『満洲紳士録』第3版、満蒙資料協会、1940年、1290 - 1291ページ。

Curriculum Vita Ohsa Miyogo (Box No.5499, Folder (48): Libraries, Sheet No. (B) 3812) .
(国立国会図書館憲政資料室所蔵)

大佐三四五『図書館学の展開』、丸善、1954年、奥付。

谷口寛一郎「図書館学究故大佐三四五君を憶う」(『図書館界』19巻5号、1968年)214 - 215ページ。

(3) 満鉄図書館史については、主に以下の先行研究を参照した。

岡村敬二『遺された蔵書 満鉄図書館・海外日本図

書館の歴史』阿咩社、1994年。

小黒浩司「満鉄図書館史の時代区分」(『満州国』教育史研究)2号、1994年)。

村上美代治『歴史のなかの満鉄図書館：図書館活動の構図と原動力』私家版、1999年。

第1章 満鉄入社と海外留学

1921年3月、大佐三四五は同志社大学英文科を卒業、4月に満鉄に入社、直ちに大連図書館勤務を命ぜられ、「初めて図書館業務に入門」⁽¹⁾する。

大佐が初めて勤務する大連図書館は、満鉄図書館の中核であり、社業の「参考図書館」として位置づけられると共に、「兼ねて公衆の閲覧に供すること」と定められ、公共図書館的な活動も行っていた。

この大連図書館では、既に柿沼介(元日比谷図書館、後に大連図書館長)や衛藤利夫(元東京帝国大学附属図書館、後に奉天図書館長)が内地の図書館から引き抜かれて勤務していた。

大佐は司書係主任であった柿沼の下でしばらく、外国雑誌記事の件名索引の作成及び翻訳などに従事し、間もなく洋書目録係に転じた。こうした図書館の業務に携わる中で、大佐は、「洋書目録のイロハから行なわなければならない」と考え、米国図書館学校への留学を希望する。そして、1924年の秋、社内で実施していた海外選抜試験を受験し、1926年10月に米国コロロンビア大学図書館学校に入学するのである。

大佐はまた、入学とほぼ同じくして、アメリカ図書館協会(以下、ALA)50周年記念大会に出席し、大会記録に日本図書館の沿革現状を説述している。

大佐はこの中で、満鉄図書館について「今や最も活動的で理想的な事業は、(中略)南満洲で見つけられることができる」、「この会社〔満鉄〕の図書館活動は、南満洲の荒野を啓蒙させる重要な役割を果たしている」などと述べている⁽²⁾。ここからは、自身の植民地・満洲における図書館活動への誇りと気負いを感じることができる。「植民地図書館人」の意識がうかがえ興味深い。

なお、コロロンビア大学図書館学校では、大佐は第1学年(学部課程)を1927年6月に卒業し、第2

学年（大学院）を 1928 年 6 月に修了して、学位（Master of arts）を取得している。大佐はその後、英国・オランダ・ベルギー・フランス・ドイツ・スイス・ソ連の各都市を視察する。帰朝したのは、1928 年 9 月である。

この 2 年以上にも及ぶ驚沢な海外留学は、大佐の一人の希望だけで実現したものではなかった。会社の人材育成計画によるものだったのである。柿沼は、戦後このように回想している⁽³⁾。

図書館の従業員の育成というのに満鉄が相当力を入れまして、ずっと前からだいたい 1 人が 2 人は文部省の図書館の養成所に留学させて、そのほかにわたくしを外国にやるとか、わたしのいったあとも、大佐君がコロンビア大学へいくというふうなことで、大いにやった。

文字通り、満鉄は図書館員の養成に力を入れており、会社創立から 1937 年 7 月までの満鉄図書館関係者で、留学の命を受けた者は 21 人に及んでいる。

その背景には、「事務の効率の上にも障害を来すこと夥しく」⁽⁴⁾と言われたほど、人材不足に悩んでいた植民地・満洲の図書館事情があった。

しかし、大多数（17 名）は、1 年間の内地留学（文部省図書館講習所）であり、海外留学は稀有なことであった。⁽⁵⁾。会社の大佐に掛ける期待のほどが伺える。

大佐自身にとって、この留学は、洋書目録法の技術を会得し、また米国における「図書館意識」が市民の間に浸透していること、欧米各国間で図書館協力体制が確立されていることなどを認識する有意義な体験となった。彼我の図書館格差は歴然としていたのである。

大佐は、帰国後発表した論文の中で、「つらつら我国の図書館界を眺めるに、空気沈滞し、其事業見るべきもの甚だ少ない」と断じ、「近代図書館事業の世界的特徴」として「一、図書購入上の協定」、「二、目録作業の中央統一」、「三、総合目録編纂事業」の 3 点を挙げ、館界の奮起を強く促すのである⁽⁶⁾。

この 3 点に注目されたい。この提唱の実現に向けて、大佐は満鉄図書館を舞台に活躍し、実現にこぎ

つけていったのである。

注

- (1) 大佐三四五「コロンビア大学図書館学部に在学の思出ばなし」(『図書館雑誌』25 年 6 号、1931 年) 203 ページ。なお、図書館雑誌の巻号のとり方は時代によって異なるが、本稿ではその時代のとり方をそのまま記載した。
- (2) Miyogo Ohsa "ON THE LIBRARIES IN JAPAN", *Bulletin of the American Library Association*, Vol.20 No.10,1926,p.248.
- (3) 柿沼介、もりきよし「連載対談 2 図書館に生きた 50 年」(『図書館雑誌』57 巻 11 号、1963 年) 509 ページ。
- (4) 神田城太郎「憶ひで出づるまゝ」373 ページ(『満鉄教育回顧 30 年』満鉄地方部学務課、1937 年)所収。
- (5) 「地方行政権移譲直前の満鉄図書館概況」258 - 260 ページ(『図書館業務研究会年報』3 輯、1937 年)所収。
- (6) 大佐三四五「晩近欧米図書館事業の趨勢と我国斯道の将来に就いて」(『図書館雑誌』118・119・120 号、1929 年)

第 2 章 撫順図書館長就任

1930 年 6 月、大佐三四五は、撫順図書館長に就任する。彼は、留学の成果を館長という立場で実践する機会を得たのである。

撫順は、満鉄が開発した炭鉱によって発展した都市であり、図書館も炭鉱都市の発達と結びついていた。在留邦人のほとんどは炭鉱関係者であった。

撫順図書館の前身は、撫順炭鉱倶楽部図書館であり、1924 年移転新築した図書館の建物は、撫順炭鉱の露天掘り開始に伴う新市街地移転の一環として建てられたものであった⁽¹⁾。撫順図書館は、ほかの満鉄沿線の中小図書館と同じく「町の書齋」として、沿線在留邦人に対する社会教育を目的として運営されていた。しかし、大佐は、撫順図書館の役割をそれだけに止めず、撫順の満鉄諸機関と情報共有をはかることで、同地の参考図書館的活動をも試みた。撫順における大佐の図書館活動は、植民地図書館としての性格を色濃く反映していた。

大佐は、館長に就任すると早速「最も適当な図書

を、最も適当な読者へ、最も適切なる方法を以って」⁽²⁾と決意表明し、米国流の利用を重視した図書館活動を展開する。

まず、館報を創刊し新刊案内など図書館サービスの広報を行い、撫順における満鉄諸機関（炭鉱や学校）に所蔵している図書の総合目録を編纂したのである。大佐が留学によって抱いた日本図書館の課題、「総合目録の編纂」をまず撫順で開始したのである。

これは、撫順図書館に不足している専門資料を補う目的があった。そして、事務所便を利用して、炭鉱事務所などを通じて図書を提供する「積極帯出」を開始したのである。

この結果、撫順図書館の月平均館外帯出冊数は、1930年度の833冊から翌年度には1,213冊へと上昇するなどの成果を得る。

大佐は、この結果を受けて、「成る可く容易に本が読める様に、周囲の環境や方法をさえ講じてやれば、即ち据膳の面倒を見てやれば、本はどんどん読まれる」⁽³⁾と説く。

こうした利用者重視の図書館思想は現在では当然のこととされているが、戦前の内地には見られないものであった。

そのほか、集会事業の実施や郷土資料の蒐集など、大佐館長下の同館は数々の事業を行った。

こうして見ると、撫順図書館がいかに華やかに感じられる。しかし、実際には、図書館の建物は工事の粗漏が多くその維持管理に大変苦労する始末であった⁽⁴⁾。そして構造上、近代公共図書館の必須条件である開架式書架が採れないという致命的欠陥を抱えていた⁽⁵⁾。

だが、建物自体は、大佐が赴任する前に立っていたもので、彼の責任ではない。それよりも、大佐が撫順中学校講師や満鉄図書館業務研究会幹事を務めるなど、自館の業務に必ずしも専念できない中において、館長として出来る範囲で図書館活動を活性化に導いたことに注目しなければならない。

注

(1) 撫順図書館の歴史、概要については、『撫順図書館報』各号のほか、下記の資料を参照した。

「撫順図書館施設案内」(『書香』48号、1933年)6

- 7ページ。

南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、南満洲鉄道株式会社、1939年、983 - 987ページ。

(2) 大佐三四五「近代公共図書館の意義と其の使命」(『撫順図書館報』1巻1号、1930年)。

(3) 大佐三四五「最近五カ年の撫順図書館統計より見たる撫順人の読書動態」(『撫順図書館報』6巻1号、1935年)。

(4) 大佐三四五「転任に臨みて」(『撫順図書館報』7巻2号、1935年)1ページ。

(5) 多くの満鉄図書館は、内地の図書館に先駆けて開架式書架を導入していたが、撫順図書館は閉架式書架であった。前掲、『地方行政権移譲直前の満鉄図書館概況』167 - 169ページ。

第3章 満洲事変と図書館活動

1931年9月に勃発した満洲事変とそれに続く満洲国建国は、満鉄図書館を戦争協力へと駆り立てることとなる。この立役者となったのは、大佐ではなく奉天図書館長の衛藤利夫であった。衛藤は、関東軍や右翼団体と親交を持っていて、政治的に「右」寄りの人物であった⁽¹⁾。

時局が拡大する中、衛藤のリーダーシップによって、満鉄図書館は、陣中文庫の募集を行い、総合目録である『全満24図書館共通満洲関係漢書件名目録』を編集する。この目録は、満鉄図書館の全館と関東庁図書館の満洲・支那関係の文献総合目録であり、大佐曰く「多数図書館共同の総合目録は欧米に於いては珍しいことでは無いが、我国に於いては、余の寡聞を以て本書が嚆矢である」⁽²⁾。しかし、大佐が留学後訴えた図書館間の相互協力は、このような戦争協力という形でもって開始されたのである。

満洲事変が拡大する時期に、大佐が戦争協力の先頭に立たなかったのは、彼自身が政治に関わりを持たない「図書館学究」だったという性格上の理由によるものと考えられる。

大佐が活躍するのは、情勢が行き着くところまで行った頃からである。満洲国建国の翌年である1933年8月、大佐は、館長会議において満鉄図書館の図

書運用について提案説明する。提案説明の重要点は、満鉄図書館間の相互協力体制の確立にあり、具体策として「各館又は共通の蔵書目録」の作成や「資料の充実（分野協定）」、更には朝鮮半島の図書館との連繋などを訴えた⁽³⁾。

大佐の図書館協力体制構想は、留学後に発表した論文にその芽生えを見ることができ、それは欧米の図書館に範を得たものであった(本稿第1章参照)。

この提案説明に対する各館長の反応を記した資料はないが、その後の満鉄図書館業務研究会の動きを見たとき、明らかに提案説明は賛同を得、大佐の具体的な提案をそのまま現実化したことが分かる。また、大佐の同研究会における発表・講演回数の多さは、彼が研究会で重要な役割を果たしていたことを裏付けるものである⁽⁴⁾。

1935年1月には、蔵書分野の協定(大連・奉天図書館を除く)が結ばれ、1936年3月には、『全満24図書館共通満洲関係漢書件名目録』の続編第一を発売、次いで、同年5月には、大連・奉天図書館間の蒐書協定が成立する。このように、図書館業務研究会は、大佐の提案を実行に移していったのである。

こうした満鉄図書館の協力網形成の実現には、大佐の特別な働きがあったこともさることながら、図書相互貸借に自社の列車便が活用でき、研究会を催すにしても社員は乗車フリーパスであるといった、満鉄図書館ならではの好条件に恵まれていたことも忘れてはならない。

注

(1) 小黒浩司「衛藤利夫 植民地図書館人の軌跡」(『図書館界』43巻5・6号、1988年)。

(2) 大佐三四五「満蒙を中心とする文献目録に就いて(一)」(『書香』42号、1932年)1-2ページ。

(3) 大佐三四五「満鉄図書館の図書運用に対する一考察」(『図書館業務研究会年報』1輯、1935年)。

(4) 特に1936年度、図書館業務研究会目録部の7本の「研究発表並講演」うち実に3本を大佐が占めている。また、大佐は1935、1936年度の目録部幹事を務めている。「目録部記事」(『図書館業務年報』3輯、1937年)11-14ページ。

なおこの時期の満鉄図書館については、小黒浩司

「満鉄図書館協力網の形成」(『転換期における図書館の課題と歴史 石井敦先生古希記念論集』緑蔭書房、1995年)所収が詳しい。

第4章 大連図書館への「栄転」と『洋書目録法の理論と実際』の出版

大佐三四五は、1936年2月1日付で大連図書館司書係主任へ「栄転」⁽¹⁾となる。この前月には大連・奉天図書館の館員が増員され、この頃は会社の努力によって両図書館が拡充された時期でもあった。

しかし他方では、前年の10月より満鉄附属地を満洲国に移譲するという「附属地移譲問題」に伴う「図書館帰属問題」が持ち上がっていた。図書館員には、「わが図書館が、行政権と共に満洲国へ移譲されるか、依然として、会社が経営するか、何れが合理的で、より有効か」⁽²⁾という大きな問題が押し掛かっていたのである。

結果としては後で述べるように、大佐の古巣である撫順図書館などの中小図書館が、館員もるとも満洲国へ移ったのに対し、参考図書館の大連・奉天図書館は満鉄に残留となる。大佐の転勤の理由は不明であるが、大連図書館への異動は、大佐が満鉄の図書館事業に残留する事実上の布石となったのである。

司書係主任の職務は、「司書に関する一切の総括」⁽³⁾となっていて、館長である柿沼を補佐し、司書集団を統括する「中間管理職」的役割にあったと言えるよう。

ところで大佐は、留学後から図書館学、特に洋書目録法に関する講師、研究活動を行っていた。その面での大佐の業績をここで纏めて紹介したい。

「満鉄短期講習会」(満鉄地方部学務課主催)で講義、満鉄図書館業務研究会で研究発表しているほか、1934年7月東京で開催された「日本図書館協会図書館学講習会」でも講師を務めている。

学術論文としては、1935年の『図書館雑誌』に「アメリカ合衆国に於ける図書館員養成の歴史的背景と最近に於ける其動向の検討」、「英米目録規則に対するボンサ氏の修正案」を発表している。

やがて大佐は自身の研究の集大成として1937年3月、『洋書目録法の理論と実際』(単著)を日本図

書館協会から出版する。本書は我が国初の洋書目録に関する纏まった著作物（それまでは簡単な手引書程度のものしか無かった）で、その理論から作成方法までこと細かく記述され、实例の目録カードまで付いていた。この本については、刊行後、天野敬太郎（京都帝国大学附属図書館）が、「大佐三四五著『洋書目録法の理論と実際』の研究」⁽⁴⁾を著していることから分かるように、すぐに館界で注目されたのである。

注

- (1) 「図書館風景」(『書香』83号、1936年)6ページ。
- (2) 「去年の満鉄図書館界」(『書香』79号、1936年)1ページ。
- (3) 前掲、「地方行政権移譲直前の満鉄図書館概況」226ページ。
- (4) 天野敬太郎「大佐三四五著『洋書目録法の理論と実際』の研究」(『図書館雑誌』31年10号、1937年)。

第5章 戦時下・南京における接收図書整理

1937年7月7日、盧溝橋事件を契機として、日本軍は総攻撃を仕掛け、北京や上海、南京といった主要都市を占領する。

盧溝橋事件を全面戦争へと拡大するにあたって関東軍と共に、満鉄の果たした役割は絶大であり、満鉄は、軍に対する各種の協力を惜しまなかった。満鉄から、応援として派遣された人員の職種は、法律専門家や医者、通訳、技術者、事務員、無線通信士、タイピストなど多岐に渡っている⁽¹⁾。

1938年6月、満鉄上海事務所資料係主任の大塚令三は、占領地区で接收した図書を整理する要員を求めて満鉄本社へ交渉に赴く。大塚は、6月7日に大連に到着し、本社幹部の了解をとると、調査局、大連図書館、奉天図書館の各々の長と折衝する。

その結果、本社からの派遣要員の長として大佐が選ばれ、合計6名の図書館員や調査員が7、8月の2ヶ月間、南京に派遣されることになった。

接收図書とは、前年の12月に軍特務部のもとに組織された「占領地区図書文献接收委員会」が主に上海及び南京の大学・公共図書館・研究所・政府官

庁などを実地調査し接收したもので、南京の地質研究所に集積されていた。しかし、これらは未整理状態だったので、新たに「図書整理委員会」が設置され、これに大佐らが派遣されたのである⁽²⁾。

この派遣は、図書館が主体となったものではなかったが、大連図書館内では、「国策の線に沿ふ図書館報国の実を示すものとして欣快に堪へない」⁽³⁾と喝采を浴びるのである。

大佐は、6月22日に大連を立ち、満鉄上海事務所での顔合わせを経て、6月30日、南京に到着する。

現地で作業方針が話し合われ、分類は、日本十進分類法（以下、NDC）に拠ることになった。現在、日本の殆どの図書館で採用されているNDCであるが、当時は採用する図書館は少なかった。結果的にはこの接收図書整理の現場がNDCの実践の場になったのである。

作業は軍の協力を得、作業や生活も軍隊式で行われた。炎天下における接收図書の整理作業は、心身共に大きな負担を強いられるものであり、精神を病んで後送される者もいた。しかし、大佐は無事使命を遂げ、9月8日には大連に戻る。接收図書の総数は、漢籍の冊数が把握しきれなかったために、大佐はおおよそ「50万内外」と掴んだ。

大佐は、この接收作業について9月22日午後6時25分より50分まで、大連中央放送局より「戦争と図書館」と題する全満放送を行う。この放送の草稿を補記したものが、「占領地区に於ける図書文献の接收と其整理作業に就いて」として『書香』(大連図書館報)の巻頭記事に掲載され、また『図書館雑誌』にも転載された。

大佐は、この報告記事の結語において、図書接收事業の意義深さを高らかに謳いあげる⁽⁴⁾。

戦争の真最中に於いて、而かも戦闘の第一線に近き占領地の各都市に於いて、かゝ意義深き文化工作が、同じ軍の手に依つて組織的に実施されつつあることは、東洋文化の為否世界文化の為、真に御同慶に耐えないところであります。

この文面からは、大佐の意識としては、「文化工

作」という意気込みがあり、あくまで文化的視点から接收図書を考えていたと読み取れる。

一方、軍や満鉄調査部関係者にとって、接收図書は兵要資料として宝の山であり、接收図書整理は、軍や満鉄調査部の「情報収集活動」の一環であった。

例えば、満鉄調査部が刊行した『支那抗戦力調査』（1940年10～12月刊行）のために、必要な文献が蒐集され、接收図書が積極的に利用されていた⁽⁵⁾。

大佐が、「文化工作」と強調したが、一般向けの広報という性質上、肝心な点が述べられなかったのではないだろうか。この問題は、次章の最後でも触れてみる。

注

- (1) 小林英夫「盧溝橋事件と満鉄 史料紹介を中心に」（『駒沢大学経済学論集』28巻3・4号、1997年）
- (2) 図書接收に至る経緯については、次の文献に拠った。
大佐三四五「占領地区に於ける図書文献の接收と其の整理に就いて」（『書香』110号、1938年）
中支建設資料整備委員会『業務概況』中支建設資料整備委員会、1941年。
- (3) 「館内彙報」（『書香』108号、1938年）5ページ。
- (4) 前掲、大佐『占領地区に於ける図書文献の接收と其の整理に就いて』4ページ。
- (5) 小林英夫編『近代日本と満鉄』吉川弘文館、2000年、248 - 249ページ。

第6章 新民会の接收図書整理

1939年3月、大佐は再び接收図書の整理のため北京に出張する。今度は、前回の南京のそれとは趣が異なるものである。今回の北京行きは、「北京新民会」という日本軍の傀儡団体による反日思想取り締まりのための接收図書整理だったのである。

新民会は、北京に樹立した親日政権である中華民国臨時政府と表裏一体をなす民衆教化団体であり、臨時政府樹立の10日後の12月24日に結成された。日本陸軍の華北占領政策によるものである。

新民会は、1938年6月13日から19日にかけて実施した「剿共滅党運動」に際して、日支憲警と合同で「清查班」を組織し、公共図書館、学校や書店など

を対象として、国共両党、排日関係図書雑誌を「清查」した。しかし、基準も何ら定められないまま接收した約7万冊と概算された図書雑誌の審査方法が問題となっていた⁽¹⁾。

大佐によると、北京新民会中央指導部長繆斌より1939年2月23日付の公函を以って、満鉄北支那事務局調査部長宛に「新民会に於いて接收せし抗日、共産党並国民党図書の整理に対し援助方申し出」の件があった⁽²⁾。

この申し出は、調査部調査課長に移牒されその結果、調査部と大連図書館からそれぞれ1名が、1ヶ月の予定で北京に派遣を命ぜられる。また、大佐も「作業打合せ並資料視察の為」10日間の同行を命ぜられ、彼は3月20日北京に到着する。

接收した図書雑誌はすべて北京にあった「新民塾」の建物内に図書、新聞に区分して収蔵してあった。接收図書雑誌の箇所別内訳は、北京国立図書館の31箱（冊数不明）や国立北京師範学院の8箱（4,697冊、新聞紙304部一カ月分を綴じたもの）をはじめ、中学校や警察局、市立通俗図書館など69機関にのぼった。

各学校図書館が提出したものや清查班が接收したもののなかには、早急になされた関係上、内容を検討すれば接收するに及ばないものが「相当多数」含まれていた。このため、図書整理の第一の目的は、差し支えないと認められるものはもとの所有箇所へ返却することであった。

大佐は、抗日排日図書の処理方法について、提言をしている。それは、参考資料として保存、活用すべきだというものであった。

東亜の新秩序に有害なる之等発禁図書雑誌類は、（中略）之を焼却厳封せんとするよりは、之を特殊資料として後日の参考資料として保管活用の途を構じ置く方が賢明なる方策なるべし。差し当たり抗日図書文献（雑誌、新聞を含む）を更に分類整理して「抗日図書館」を設置しては如何と考へられる。（中略）

「抗日図書館」が設置さるゝ暁には、之を移管せば、以て有力なる資料としての内容を具備するに至るべし。

この報告は、満鉄調査部の極秘扱刊行物に掲載されたものである。前回の南京出張の報告は、「文化工作」であることを強調していたが、今回の場合はそういった記述は一切なく、情報資料としての接收図書整理を説いている。非公表刊行物だけあって、こちらの方が、接收図書の価値に関する大佐の「本音」が表れていると考えられる。

注

- (1) 新民会中央指導部編『剿共滅党運動報告書』新民会中央指導部、1938年。なお、新民会の図書接收については、機会を改めて詳しく述べたい。
- (2) 大佐三四五「北京新民会接收図書 整理状況視察報告」(『満鉄資料彙報』4巻4号、1939年)。以下同書による。

第7章 国境を越えた図書館協力の提唱

第1次世界大戦後の国際協調の時代のなかで、図書館界でも世界協力・世界強調の波が高まっていた。

1922年5月、国際連盟によって、「知的協力国際委員会」が設立され、国際図書館の設立や書誌の国際的な組織化などが討議される。1926年1月には、同委員会の執行機関として「知的国際協会」が設立され、各国の著名図書目録の編纂が進められる⁽¹⁾。

大佐は、留学中に参加したALA50周年記念大会でこうした動向について知り、以後国境を越えた図書館協力の提唱者となる。帰朝後発表した論文の中で、日本が図書館の世界協調の流れに乗り遅れないよう説いている⁽²⁾。また、1930年10月、「世界的良書」を著し、「知的国際協会」の活動を紹介する⁽³⁾。

しかし、満洲事変が世界の批判を浴びる中、1933年3月、日本は国際連盟を脱退し、世界のなかで孤立感を深めていく。国際連盟の脱退は、同時に「知的国際協会」の世界的な図書館協力体制との決別であった。満洲事変以降、満洲では満鉄図書館協力網が形成されるのだが、皮肉にも満洲事変は、世界各国との図書館協力を困難にさせていったのである。

大佐は、朝鮮や満洲、中華民国との連携を提唱するようになる。これは、世界情勢が米英などとの図書館連携を許されないなかでの精一杯の構想だった

と言えるのではないだろうか。

大佐は、「第1回鮮満図書館連合研究会」(1932年9月、満洲安東)⁽⁴⁾、「満鉄図書館長会議」(1933年8月)⁽⁵⁾、「第2回鮮満図書館連合研究会」(1936年10月)⁽⁶⁾において、まず満洲と鉄道で直接結ばれている朝鮮半島との連携を提唱し、特に図書の相互貸借体制の確立を強調する。

そして、1937年6月の全国図書館大会(満洲で開催)においては、「中華民国図書館協会ト一層密接ナル関係ヲ図ル件」を提案するのである。大佐はこの全国図書館大会の提案の中で、欧米に比して図書館間の相互連絡(特に独・仏・英国等の図書の相互貸借・書誌学的交換等)が盛んに行われているのに対して、「この国際的方面に於ける発展は未だしの感がある」と述べ、今後の中華民国との交流を訴える⁽⁷⁾。

しかし、こうした国境を越えた図書館協力の提唱は、日本満洲朝鮮など限られた地域でさえ頓挫してしまう。翌年の12月には鉄道附属地移譲に伴う満鉄図書館の満洲国への移譲、そして調査部の図書館統制が開始され、満鉄図書館は館員の望まない形へ変容していくのである。

注

- (1) 「知的協力国際委員会」及び「知的国際協会」の活動については以下の先行研究を参照した。
- 岡村敬二「世界書誌の夢 オトレトラ・フォンテーヌの世界宮殿」(『大阪府立図書館紀要』29号、1993年)。
- 前掲、岡村『遺された蔵書』253 - 300ページ。
- (2) 前掲、大佐「輓近欧米図書館事業の趨勢と我国斯道の将来に就いて」261ページ。
- (3) 大佐三四五「世界的良書」(『図書館雑誌』131号、1930年)。大佐の著述では、「国際知的協調委員会」であるが、先行研究との整合性を踏まえ、本稿では「知的国際協会」の名称を用いた。
- (4) 「満鉄図書館だより」(『書香』43号、1932年)6ページ。
- (5) 前掲、大佐「満鉄図書館の図書運用に対する一考察」(『図書館業務研究会年報』1輯、1935年)。
- (6) 「図書館時事」(『図書館雑誌』30年12号、1936年)342 - 343ページ。

(7) 「第三十一回全国図書館大会議事録」(『図書館雑誌』31年8号、1937年)238ページ。

第8章 満鉄図書館の改組

1937年11月、満鉄が有していた鉄道附属地が満洲国に移譲される。同時に、満鉄が鉄道附属地で運営していた図書館などの公共施設は、職員ごと満洲国へ移される。これにより、満鉄という単一の経営母体によって培われたネットワークは分解した。

満鉄には、大連・奉天・哈爾濱図書館が「社業参考図書館」として留保され、社員の福祉のために幾つかの図書館も残された。

この前後の時期、満鉄は会社全体として大きな転換期にあった。関東軍は、1937年に満洲重工業株式会社を設立して、多くの満鉄事業を移管させた。日本の満洲経営のなかの満鉄の比重は軽くなりつつあった。

落ち込み停滞していた「満鉄コンツエルン」がとった失地回復策は、調査機関の拡充による社業の調査機関化であった。折りしも、軍部は日中戦争の持久化を打ち切るための政策立案を満鉄調査部に期待していた。これに応えた満鉄調査部の報告書が先述した『支那抗戦力調査』だったのである。

大連図書館では1936年4月から、調査関係業務の増大に対応するために中等学生の入館を断るようになるが、その事情について、大佐は利用者に向けて次のように説明している。この一文から、調査部拡充の動きが、大連図書館にも早い時期から影響を及ぼしていたことが分かる⁽¹⁾。

近年満鉄会社に於いては、調査関係業務が益々増大し、社員の当館を使用するもの愈々煩繁となり、本館の本来の社業参考図書館としての使命を達成せんが為には、図書蒐集上、社業の参考資料に専ら集注することが益々切実となった。それで、中等学生の利用に応ずることは、蒐集並に蔵書の種類程度よりしても、収容人員の関係よりしても速早困難(後略)。

1938年4月、調査部の再建に伴って大連図書館は

産業部から調査部所属になり、同部資料課資料室の移管を受けた。同時に、調査部資料課と大連図書館の関係について「資料の蒐集は資料課が、資料の整理及び保管は図書館が、之に当たる」⁽²⁾と決められた。この決定は、大連図書館にとり大きな岐路であり、選書の任務が調査部資料課に奪われたことにより、大連図書館はその運営の主体性を失うことになったのである。

翌月には、大連図書館の事務分掌規定が改定され、庶務・司書係から庶務・書目・運用の3係体制となった。これは、同館が「満鉄社業の参考機関として益々その重要性を加ふるに至つた」⁽³⁾ためであった。この改組により大佐は、書目係主任になる⁽⁴⁾。

注

- (1) 大佐生「満鉄図書館閲覧規則の改正に就いて」(『書香』82号、1936年)1-2ページ。
 (2) 「資料機関連絡事務打合せ会議々事報告 自五月七日至九日、於厚生会館」(『満鉄資料彙報』5巻5号、1940年)64ページ。
 (3) 「館内彙報」(『書香』105号、1938年5月)7ページ。
 (4) 「満洲館界便り」(『図書館新報』14号、1938年)2ページ。

第9章 満鉄調査部との対立

1939年4月、「大調査部」が成立し、遂に満鉄調査部は、ニューヨークやベルリンなど欧米の満鉄事務所も傘下に収めた世界的な調査機関となった。人員も、例えば、1939年度のスタッフ1,731人が、翌40年度には2,345人へと、一挙に増員されている。

満鉄は、調査部の拡充に対応するため、「赤くずれや前歴もの」を大量に入社させた。この中には、後に満鉄図書館再編成に於いて重要な役割を担うことになる石堂清倫(1938年7月入社)もいた。新規に採用された調査部員たちは緻密な調査を行い、その成果は『支那抗戦力調査』や『戦略物資と外交政策』に代表されるように、大変な先見性を持ったもので、学問的にも高く評価されてきた。

こうした状況下、満鉄が会社としてとる図書館の充実とは、図書館の調査機能の充実であった。しか

し、大連図書館員たちの思い描いていたのは、公共図書館的な活動であり、また「広く深く、東洋を眼目として蒐書し、東洋文化を中心とした図書館」⁽¹⁾の発展であって、会社の方針と食い違っていた。

特に、調査部員たちは、大連図書館に対して、「あれは公開図書館という意味で、専門的な資料なんか集まっていない」⁽²⁾と不満を抱き、中でも石堂清倫は図書館を調査機関として明確に位置づけようと積極的に行動した。

1940年3月末、柿沼介が満鉄を去り、後任には調査部資料課長の兼務で水谷国一が就任する。この時期の事情については、大佐の下で南京の図書接收に携わったことのある青木実の回想があり、柿沼退職の背景に、図書館と調査部の対立があったことが分かる⁽³⁾。

満鉄の全体主義化は事変の拡大と共に進行した。(中略)図書館も例外ではなかった。満鉄資料課の図書館運用(?)の企画は、事前に察知したわれわれが柿沼さんに無断で文章をもって時の総裁に直訴して阻止することができた(いわゆる図書館怪文章事件)。しかし調査部の図書館運用方策は着々と潜行し、柿沼さんは調査部の幹部と満鉄首脳部の前で対決された。(中略)

調査部案実施とともに、柿沼さんは退職された。

大佐にとって、柿沼の退社は「惜別の情、誠に禁じ難きもの」⁽⁴⁾であり、大佐自身の立場も危うくなって来た。この頃になると、大佐は大連図書館に属しながら、図書館の仕事をさせてもらえなくなっていたのである。

石堂は、大佐が大連図書館を離れて、調査部建物(大連図書館の隣にあった)の地下にあった資料室で事務をしていたと証言している⁽⁵⁾。

〔調査部資料室の〕第一資料係には貸出業務、目録作成業務など事務的技術的な仕事を処理するために大連図書館から書目係主任1名、職員または雇、傭員の運用係が4名出張してきてい

て、貸出しと返納の事務などを受け持っていました。私のときは大連図書館から大佐三四五主任が来ていました。

この証言は、大連図書館が調査部の下請けに位置づけられ、大佐がこうした図書館の使命とは外れた仕事をさせられていたことを意味する。図書館を離れた、主体性のない資料室での貸出業務、目録作成等は、大佐の本意ではなかったであろう。

1940年5月、「資料機関連絡打合会議」と、それに続く「図書館運営に関する分科会議」が開かれ、図書館の運営方針が議題に上る。席上、大佐は、水谷や石堂らに対して、調査部に奪われた大連図書館の主体的な資料蒐集活動の回復を強く訴えた⁽⁶⁾。

大連図書館に於ける蒐集は将来も資料課に於いて行う方針であるか。図書館と資料課とは、本質的に異なり図書館は本質的に異なり図書館は図書館としての性格よりその蒐集を行ひたいと思ふが、その点を明白にして欲しい。(中略)従来の儘では図書館は何等の個性もなく倉庫の番人でしかない。

しかし、大佐の訴えは調査部に受け入れられることはなく、例えば石堂は、「資料課と図書館を截然と区別する如きは困難であらう」と冷やかな反応を示すのである。

やがて、柿沼と同様、大佐も満鉄を追われる時が来た。1940年9月、大佐は「社員非役規程第一条第二号ニ依リ非役ヲ命ス(総裁室勤務)(九月十日)」⁽⁷⁾と命ぜられる。後任には、大佐と対立していた石堂が調査部資料課第一資料係主任と書目係主任を兼務することになった。この人事は、調査部首脳に真っ向から反発する発言をしていた大佐に対する追放処分と言えよう。

なお、大佐の満鉄退社は、翌年の1941年2月であった。彼が「非役」を命ぜられてから退社までの約5ヶ月間の待遇等は詳らかでない。

大佐は、満鉄が図書館を経営したことによって、生まれ育てられた人材であったが、不本意ながら図書館を巡る会社業務の再編によって会社を追われる

ことになったのである。

大佐が満鉄を退職して間もない1941年12月8日には、太平洋戦争が勃発する。

注

- (1) 青木実「大連図書館の特殊性」(『満洲浪漫』3輯、1939年)199ページ。
- (2) 前掲、柿沼、もり「連載対談2 図書館に生きた50年」510ページ。
- (3) 大谷武男「大連図書館長時代の柿沼さん」123ページ(柿沼介『剩語』剩語刊行会、1972年)所収。
- (4) M.O.〔大佐三四五〕「柿沼館長を送る」(『書香』122号、1940年)1ページ。
- (5) 石堂清倫「満鉄調査関係者に聞く第31回 調査部資料室と大連図書館 昭和14(1939)年~昭和20(1945)年」(『アジア経済』30巻2号、1989年)123ページ。
- (6) 前掲、「資料機関連絡事務打合せ議事報告」65ページ。
- (7) 『社員録』昭和十五年七月一日現在、南満洲鉄道株式会社、1940年、827-828ページ。

おわりに

1941年2月、満鉄を退社した大佐は、北支那開発株式会社に入社。北京支店調査局に勤務する。同年11月には、同社の東京本社調査局支局に異動し、大連の家族を纏めて東京市に居を移す。

大佐は在勤のまま、1942年4月から12月の間、文部省図書館講習所の講師を勤める。その後、大佐は1943年1月より、内閣所管調査研究動員本部の資料部主事を勤める。敗戦直前の1945年6月より日本外政協会参事調査局資料課長の任に就く。同年8月の日本の無条件降伏を経て、1946年1月までこの職にあった。大佐が満鉄退社後に勤務した諸機関の実態については殆ど不明であり、したがって彼の具体的な仕事内容は判らない。今後調査を進める必要がある。

以後、大佐は占領軍関係の仕事を経て、巻末の年譜で見ると、CIE図書館長や、大学図書館事務長、松下電器や米国議会図書館勤務、図書館講習会

講師など各職で活躍する。

大佐同様、柿沼や衛藤といった満鉄図書館出身者も、戦後の日本図書館界で活躍しており、「ある意味では戦前に内地で専念された方よりはどちらから言えば満鉄、あるいは朝鮮から引き揚げられた方のほうが第一線で活躍されているよう」⁽¹⁾、「大きな公共図書館・大学図書館には、必ずといってよいぐらい旧満鉄図書館出身者がいた」、「戦後出来た多くの新制大学の(中略)図書館への人材供給源となったのが、旧満鉄図書館」⁽²⁾とまで言われているのである。

戦後の日本図書館を大佐三四五ら満鉄図書館出身者が背負ったということは、明白な事実である。

満鉄図書館の活動には、図書館ネットワークの形成など先進的な図書館活動という注目すべき点があったが、他方では戦時下の中国図書の接收に象徴されるような「侵略性」もあった。植民地支配と戦争から派生するさまざまな事柄が、結果として我が国の図書館界の人材育成に繋がったのである。

現代日本の図書館員は、このような我が国の図書館史を如何に評価すれば良いのか。問題は単純ではないが、本格的に議論する必要がある。

注

- (1) 前掲、柿沼、もり「連載対談2 図書館に生きた50年」509ページ。
- (2) 中見立夫「衛藤利夫と韃靼 戦前期中国東北地域における図書館と図書館人」287ページ。(衛藤利夫『韃靼』中央公論社、1992年)所収。

(Received: May 31, 2004)

(Issued in internet Edition: July 1, 2004)

大佐三四五年譜

| | | |
|-------|-----|--|
| 1921. | 3. | 同志社大学英文科卒業 |
| | 4. | 満鉄入社、大連図書館勤務 |
| 1924. | 秋. | 海外選抜試験受験 |
| 1925. | 9. | 海外留学の命を受ける |
| 1926. | 7. | 海外留学に出発 |
| | 10. | コロンビア大学入学、ALA50周年記念大会参加 |
| 1927. | 6. | コロンビア大学図書館学校第1学年卒業(学士) |
| 1928. | 6. | 同校第2学年卒業(修士) |
| | 9. | 欧州視察後帰朝、大連図書館勤務 |
| 1930. | 6. | 撫順図書館長就任 |
| | 9. | 『撫順図書館報』創刊、積極帯出、 各種目録編成開始 |
| 1932. | 5. | リットン調査団撫順滞在中、通訳と接待を担当 |
| 1933. | 8. | 満鉄図書館の相互協力について提案説明 (館長会議) |
| 1934. | 2. | 日本図書館協会社会教育調査委員 (~1937.6) |
| | 7. | 日本図書館協会主催図書館講習会講師 |
| 1936. | 2. | 大連図書館に異動、司書係主任 |
| 1937. | 3. | 『洋書目録法の理論と実際』出版 (1941.5 日本図書館協会総裁賞授与) |
| | 6. | 中華民国図書館協会との連繫を提案 (全国図書館大会) |
| 1938. | 5. | 書目係主任に転任 |
| | 6. | 中支那占領地区接收図書整理のため南京に出張(~8月) |
| 1939. | 3. | 北京新民会接收図書整理のため北京に出張 |
| 1940. | 5. | 図書館運営方針に意義を唱える (事務打合会議) |
| | 9. | 書目係主任解任、「非役」を命ぜられる。 |
| 1941. | 2. | 満鉄退社、北支那開発株式会社入社 |
| 1942. | 4. | 文部省図書館講習所講師(~12月) |
| 1943. | 1. | 内閣所轄調査研究動員本部資料部主事 |
| 1945. | 6. | 日本外政協会参事調査局資料課長 (~1946.1) |

| | | |
|-------|-----|--|
| 1946. | 1. | 米国赤十字米軍将校倶楽部図書館長 (~9月) |
| | 10. | 日本学術研究会科学文献総合目録技術委員 (文部省) |
| 1947. | 5. | 日本学術研究会学術用語調査委員会図書館 用語調査分科会主査 |
| | 6. | 第1軍団近畿民政部顧問、民間情報教育監察 官兼京都 CIE クルーガ図書館長 |
| | 8. | 京都府社会教育課長 |
| 1948. | 5. | 京都大学文学部講師(図書館学、兼務) (~1950.3) |
| | 9. | 京都府総務部文書課長 |
| 1949. | 6. | 京都府を辞職 近畿地区視覚教具本部長に専任 |
| | 9. | 京都学芸大学図書館事務長 |
| 1951. | | 文部省主催図書館専門職員養成講師(京大、 広島大、徳島大、鹿児島大)(~1954) |
| 1954. | 6. | 『図書館学の展開』を出版 |
| 1955. | | 文部省主催学校図書館司書教諭養成講座主 事(京都大学) |
| 1959. | 11. | 『資料の整理と目録の作成』を出版 |
| 1961. | 3. | 京都学芸大学を定年退職 |
| | 4. | 松下電器入社、本社史編纂室勤務 |
| | 11. | 日本図書館協会より表彰せられる |
| 1962. | 8. | 文部省委嘱桃山学院大学司書講習講師 |
| 1964. | 5. | 松下電器退社 |
| 1964. | 6. | 米国国立議会図書館勤務 |
| 1965. | 9. | 帰国 |
| 1966. | | 松下電器工学院、金蘭短大講師(図書館学) |
| 1967. | 4. | 『社史の編纂と作成』を出版 |
| | 12. | 逝去 |

(注) 前掲、谷口「図書館学究故大佐三四五君を憶う」中の「故大佐三四五略年譜」を下敷きに作成。